
魔法少女リリカルなのはM E G A M A X S A G A

ゼロディアス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはMEGAMAX SAGA

【NNコード】

N9302Y

【作者名】

ゼロディアス

【あらすじ】

ベリアル銀河帝国を壊滅させて早数ヶ月、ゼロが結成したグレンファイヤー、ミラーナイト、ジャンボット、そしてウルトラマンゼロのウルティメイトフォース・ゼロはダークロープスゼロと遭遇し、ロップスゼロの力により異次元へと飛ばされる。

そこは魔法、スーパー戦隊、仮面ライダー、星の戦士達、魔弾戦士、その世界のウルトラマンが存在する世界……。

魔法少女リリカルなのはMEGAMAX SA、始まります。

これはゼロシリーズのリメイク版です。

第1話『ウルティメイトフォース・ゼロ』（前書き）

ゼロシリーズのリメイクです。
ゼロまどは大丈夫な筈……。

第1話『ウルティメイトフォース・ゼロ』

ベリアル銀河帝国を壊滅させ早数ヶ月。

光の国¹のウルトラ戦士、ウルトラセブンの息子「ウルトラマンゼロ」は別の宇宙で出来た仲間、赤い炎の身体を持つ炎の戦士「グレンファイマー」、鏡を操る緑の線が身体にある銀色の鏡の騎士「ミラーナイト」、赤と白の巨大な口ボ鋼鉄の武人「ジャンボット」達と共に結成した新しい宇宙警備隊「ウルティメイトフォース・ゼロ」の4人はある小惑星に降り立ち、4人は話しあっていた。

『これにてパトロールは終了だな』

「ああ、ジャンボット。一旦光の国へ帰らねえとな」

グレンファイマーは大きく欠伸し、早く帰るよつに言つ。

「早く帰ろうぜ、こんな所いたら風邪退いちまう」

だがその時、こちらに幾つかの飛行物体が接近しているのが見えた。

「待てグレン！ こっちになにか近づいている！」

「あん？」

ミラーナイトの言葉で、グレンファイマーは上を見上げると一つ目の黒とオレンジの身体を持つ機械巨人……「ダークロープスゼロ」が腕を二字に組みあわせて必殺光線である「ダーコロープスゼロショット」をゼロ達に放った。

「ぐわあああ……？」

「……」

「くつそ、ダークロップスゼロだとー!?」

ダークロップスゼロは胸部を変形させ、「デイメンジヨンコア」と呼ばれるものをして、そこから相手を次元の彼方にまで吹き飛ばす超時空波動光線「デイメンジヨンストーム」が放たれ様としていた。

「させるかよー!!」

「先制攻撃たあやつてくれんじえねえか!! ファイヤースティック!!」

ゼロと炎のステイック型の武器「ファイヤースティック」を持つてロップスゼロに攻撃仕掛けるが、ロップスゼロは素早い動きでゼロとグレンファイヤーの攻撃を後退して避け、デイメンジヨンコアにエネルギーが充填される。

そして「デイメンジヨンコアから嵐を巻き起こす様な「デイメンジヨンストーム」がまずはゼロとグレンファイヤーに放たれる。

「「ぐわあああーーーーー?」「

「ゼロー!!」

『グレン!!』

ジャンボットとミリィーナイトがどうにか2人を助け出そうとするが、彼等もまたデイメンジヨンストームに巻き込まれてしまい、ウルティメイトフォース・ゼロはデイメンジヨンストームによつて割れた空、次元の彼方へ飛ばされてしまった。

*

此處はゼロ達がいた世界にあつた地球とは別の世界の地球……。

その地球の「海鳴市」のある公園で、2人の少年が倒れていた。

「つて……んつ？」

その少年は顔が若干「DOG DAYS」の「シンク・イズミ」に似ていたが、彼よりも凜々しい顔をしていた。

少年は隣で眠っている少年の姿を見る。

その少年は「フュイト・ゼロ」の「ランサー」に似ており、一向に目を覚ます気配がない。

シンク似の青年は自分の身体を見るも否も、目を見開きつつ顔をペタ触る。

「俺……地球人の姿になつてんのか……？」

実はこの少年、お気づきになつてる方もいるやもしれないが、ウルトラマンゼロが地球人の姿になつたものだった。

「じゃあこいつは？」

隣の少年は誰なのか搔さぶつて起^レして見る事に。

「うう……んつ？ だ、誰だ貴様！？ ジ、ジジはどうだ…？ みんなは……！？」

目の前的人物がゼロである事に気付かず、ミラーナイトはゼロを睨みつけ身構えた。

「その声からしてお前、ミラーナイトだな」
「なぜ私の正体を……？ まさか、ゼロ？」

隣で眠っていた青年はミラーナイトが人の姿になつたものである。

「グレンとジヤンボットは？」

「分からねえ、あいつ等とはばぐれちまつたみてーだな」

兎に角、此処にいても始まらないのでミラーナイトとゼロは歩き始めること。

「だが、ゼロはまだ地球の年齢ではそこまで小さかったのだな」「それを言つのならお前もだろ」

ミラーナイトとゼロの見た目は小学生ほどである。

「じつかし、レジは見た所、親父達の言つてた地球だな」

ゼロやミラーナイトについて、今まで映るものは全て珍しいものばかりだった。

「そう言えば、地球人と出会つた時、名乗る時はなんと名乗る？」

流石に我々の名前をそのまま使つ訳には……

「そうだな……」

そこで2人は考えた結果、ゼロは以前同化していた人間の名前と、セブンが地球人の姿になつた時に使つていた名前の苗字をとつて「モロボシ・ラン」と名乗る事にし、ミラーナイトは「騎士鏡太きし きょうた」「騎士鏡太きし きょうた」と名乗ることにした。

*

その頃、グレンファイヤーとジャンボットは……。

グレンに至つてはランや鏡太と同じ様に人の姿になつており、フュイトシリーズのギルガメッシュに似ているが髪の色は赤の少年になつていた。

彼は森の中で倒れており、そこに1人の青年が駆けつける。

「グレン！　おいグレン！」

ジャンボットと同じ声を発する青年。

「うーん……。宇宙帝国ザンギャックとの戦いで失われたスーパーウォーズの力を受け継いだのは……とんでも無い奴等だった！！」「どんな寝言だそれは！？」

グレンファイマーの有り得ない寝言でシッ ハリツハ、青年はグレンファイマーを叩き起こした。

「いつてえ！？ なにすんだよ！？ あつ？ お前、誰だ？」
「ジャンボットだが？」

その青年は自分が「ジャンボット」であると言つてきた。

「なにいいいい！！！？ 焼き鳥！？」
「焼き鳥では無い、ジャンボットだと言つてこるだろ！… ほり、水を持ってきたぞ」

実はジャンボット、身体を縮小させる機能がジャンボットの状態で使えることが出来るらしく、もしもの場合は人の姿に変わる機能まであつたらしいのだ。

そして、ジャンボットの容姿はガンダム〇〇のティエリア・アーテ似であり、グレンファイマーを起こして歩き始める。

「ゼロ達は？」
「分からぬ、ばぐれてしまつたようだ」

ジャンボットはグレンファイマーに此処はゼロの言つていた地球だということを説明し、ゼロの師匠「ウルトラマンレオ」の話を聞いたことがある為、一応地球人らしい名前を2人は考える。

「『岬炎斬』。 どうだ？ カッケエだろ？」
「ナオの名前を借りて『鋼ナオキ』という名前で行くか」「おい、無視すんな焼き鳥！ 焼くぞ！」

こうしてグレンファイヤーは「岬 炎斬」、ジャンボットは「鋼ナオキ」という名前が決定した。

彼等もまた歩き出し、森を抜けて街を歩き、人気のない場所を歩く。

「にしても腹が減った……。肉が食いてえ！」

炎斬の腹が音を鳴らし、腹を手で押された。

「しかし、この星の金などは無いしな……。どうしたものか。私は一応別に何も無くても大丈夫なのだが」

そして耐えきれなくなつたのか、また炎斬は道端で倒れてしまつ。

「グレン！！」

*

一方、炎斬とナオキを探しているランと鏡太はまた先程と同じ、かなり広い公園に戻つて来ていた。

「グレンもジャンボットも見つかねえな

「……」

静かに林ばかりがある場所を見る鏡太。

「どうした？ ミラー…… 鏡太？」

「ああ、林の中でなにか聞こえたような……」

その時、林の中からなにかが爆発するような音が聞こえ、ランと鏡太は急いでその場所に向かう。

そこでは、変わった服装をした少年が黒い怪物と戦つており、怪物は少年に襲い掛かるが少年は右手からバリアラしきものを展開。

だが、ランと鏡太が乱入して怪物を思いつきり蹴り飛ばした。

「「うおおお！」」

【グオオオ！-！？】

「ええつ！-？」

ランと鏡太の乱入に、驚きつつも、鏡太が少年に駆け寄る。

「君、大丈夫か！？」
「あつ、はい……」
「ここは僕達に任せて君は逃げるんだ」

しかし、少年は「いや、でも……」となにか言いたげだが、ランは左腕の銀色のブレスレット、「ウルティメイトブレスレット」からメガネ型のアイテム「ウルトラゼロアイ」を取り出す。

「ゼロ！ この少年の前で変身するのは……」
「仕方ねえだろ！ 生身でどうこう出来る相手じゃねえ！」

ウルトラゼロアイを目に装着し、ランは光に包まれてゼロの姿となり、頭に銀色の2本のブーメラン「ゼロスラッシュガード」が装着され、赤と青の身体を持つ等身大の「ウルトラマンゼロ」に変身し、すぐさま怪物を殴り飛ばした。

「シユア！！」

〔グゴオオ！！？〕

両手を「キ」キとな鳴らし、ファイティングポーズを構えるゼロ。

「テーマの相手は……俺がしてやるぜーーー！」

第1話 『ウルティメイトフォース・ゼロ』（後書き）

炎斬の寝言はもちろん声ネタですw

第2話『Wの変身／2人で1人の仮面ライダー誕生』

光の国の戦士、ウルトラセブンが息子、「ウルトラマンゼロ」は一気に黒い怪物に突っ込んで行くと強烈なパンチをお見舞いする。

「デリヤアア！－！」

【グゴオ！－？】

さらにゼロは怪物に廻し蹴りを食らわし、頭部に強烈チョップと次々強力な技を打ちこんで行く。

「シユア！－！」

【ギシャアアア！－！？】

怪物が身体から黒い弾丸をゼロに放つてくるが、ゼロはそれらをなんとか避け、頭の上にあるブーメラン、ゼロスラッガーを怪物に投げつける。

「シェア！－！」

ゼロスラッガーは怪物を切裂き、真つ二つになつたが、真つ二つの身体はまた元の一つの身体に戻り再生してしまつた。

「なに！－？」

「再生した！－？」

戦いの様子を伺っていた鏡太も驚き、鏡太の隣にいる少年は「ダメだ、それじゃ……」と呟く。

「「れなりじうだーー！」

腕を「」字に組みあわせ、必殺光線である「ワードゼロショット」を怪物に発射し、怪物はあちこちに破片となつて飛び散り、その破片は地面に当たると地面が凹んだり、木に当たると木が倒れたりして消滅したかに思われたが、再び再生し、身体から帶らしきものを出してゼロの両手、両足を拘束する。

「なに！？ 離せーー！」

怪物を動きを封じたゼロに飛びかかる。

「ランーー！」

鏡太が助けに行こうとするが、それよりも先に少年が飛び出し、ゼロの前に立つ。

「バカ！ 来るんじゃねえーー！」

「くつー！」

少年は右手を怪物の前にかざし、バリアらしきものを展開して怪物の攻撃を防ぎ、なにか呪文のようなものを呟いて行く。

「ジユエルシード、封印ーー！」

バリアに弾かれた様に怪物はゼロを解放して吹き飛び、何処かに逃げようとするが少年がチーンのようなものをバリアから出して怪物を拘束。

「今ですーー！」

「やるじゃねえか

ゼロはゼロスラッガーをカラータイマーの両側に装着し、そこから放つ光の光線「ゼロツインショート」を怪物に直撃させる。

「逃がすかよつ……」

【ギシャアアアア！……？】

怪物はゼロツインショートの衝撃でチーンが破壊され、怪物はかなりの距離を吹き飛んでしまい、結局逃がしてしまった。
(今の状態だと、弱らせるのが最優先だな……)

少年はそう思いながら急いでその怪物を追いかける。

「逃がしてしまったか」

ランの姿に戻ったゼロに、鏡太が駆け寄る。

「ああ。 それにしても、アレとお前の正体はなに……ってあり?」

ランと鏡太はあの少年を探すが見当たらず、この公園の中を探しましたが、結局見つからなかつた。

*

その頃、「高町家」という表札がある家。

「んっ？」

高町家の家のある部屋で、メガネをかけた頭にクリップをつけた少年「高町ライト」がなにかを感じた。

「この世界に、なにか来たようだね……」

それと同時に、彼の義理の姉である「高町なのは」はある夢を見ていた。

『誰か……僕の声を聞いて!』

それは先程の戦闘がなのはの頭の中に流れており、赤い宝石を首にぶら下げたフェレットが誰かになにかを訴えかけようとしていた。

「朝だよ姉さん、起きないと」

「ふえ！？」

気付けばもう朝、なのははライトに起こされ、半分寝ぼけながら姉の「高町美由紀」、兄の「高町恭介」、父の「高町士郎」、母の「高町桃子」と朝食を済ませ、友人の金髪の少女「アリサ・バーニングス」と紫の長い髪の少女「月村すずか」と共に聖祥大付属学校にバスに乗つて向かつた。

そのバスにはライトも乗つているが、彼は隅っこで外を眺めてるだ

けであり、なのはやアリサ、すずかの会話に入りうらしなかった。

「アンタも少しさなにか話したらどうなのよ？」

アリサがライトに言つた。

「僕はそういうのが苦手なんだ。『ごめんね』

ライトは申し訳なさそうにするが、アリサはため息をついてなのはとすすかと再びお喋りをしだす。

(ライトくん、どうしてあんなに他人を避けるのかな?)

すずかはライトに対してそう思い、一方でのランと鏡太は……。

*

「は、腹が……減つて……」

「水……水で腹を満たせば……、でもやつぱり満ちた気がしない」

あの公園で一夜を過ごしており、ランはベンチでぐったり倒れ、鏡太はフラフラしながらも水を飲みに行こうとする。

因みに元の世界に帰つてセブン達にジャンボットとグレンファイヤーの搜索を手伝つて貰おうとウルティメイトブレスレットの力を使おうとしたが、力が足りないのか、次元を超えられなかつた。

さらに言えば、ここが自分達のいた世界の地球ではないか調べた所、かつて地球を訪れたウルトラマンを知る者は誰一人としていなかつた。

なお、ランが戦闘を行つた場所はボロボロであり、警察などが来ており、立ち入り禁止になつてゐるが此処までは立ち入り禁止にはなつていない。

鏡太もあまりにも空腹な為、鏡太は倒れこむ。

そこへ偶然通りかかつた茶髪のチャージを着た男性が2人に声をかける。

「大丈夫か！？」

その男性は「トウモロー・リサーチ」と呼ばれる何でも屋を経営しており、2人を担いでそこまで運んだ。

「ウメーデコレ！－」

「申し訳ありません、お世話になつてしまい……」

ランはコンビニで男性……「浅見竜也」^{あさみたつや}が買つてきた弁当を美味しそうにガツガツ食べており、鏡太も竜也が買つてきて食べながら竜也に申し訳無さそうにしていた。

『お食事タイム！－』

「「うおッ！？ なんだコイツー！？」

両腕を同時振り上げたりする小型のロボ、「タイムロボター」に驚くラン。

それに引き換え、鏡太は特に驚いていなかつた。

ランもよくよく考えればロボターよりも凄いロボットや、他のウルトラマン達から聞いた兵器を知つていていた。

ジャンボットとかメテオールとかガ○ダムとか。

「待て待て！ 今なんか明らかにおかしいのがあつたぞ！」
「誰にツツコミを入れてるんだラン？」

竜也はロボターを持ち上げてテーブルに置く。

「ああ、こいつはな、故郷に帰った俺の仲間が作ったロボットなんだよ」

どこか懐かしそうに、楽しそうに話す竜也。

「すこませへん、ジェット便です」

とやっこくこくへ宅配にきた男性が入ってきた。

「あっ、天馬！」

男性の名前は「工藤天馬」といつ名前であり、決められた時間内に宅配ものを配る宅配便である。

くどうひでんま

「荷物持つてきました竜也さん」

小さな段ボールの荷物を笑いながら竜也に渡した後、天馬はランと鏡太を見る。

「えーっと、隠し子？」

「なにをどうしたらそんなんだよ！？」

苦笑いしながら言う竜也、その後、天馬はバイクに乗って仕事に戻り、竜也に「家とかはどこ？」と質問され、困り顔のランと鏡太だが、仕方なく鏡太は自分達には帰る場所が無いと説明。

竜也は敢えてその理由を聞かなかつた。

「帰る場所が無いならここにいていいよ。でもさ、話す気になつたらちゃんと俺に言ってくれよ？」

ランと鏡太の肩を優しく叩き、笑顔を向ける竜也。

「どうして……」

「まあ、見た感じ、君等家出かなんかだろ？ 俺も家出中だし、だから俺が注意したら『お前が言つたな！』って感じになつちゃうからさ」

苦笑いする竜也。

そしてランと鏡太はトウモロー・リサーチに住む事になった。

*

その深夜の出来じと、ランと鏡太はなにかを感じたのか、目を覚ました。

「ラン……」

「お前も感じたか」

外に出てランと鏡太はそのなにかを感じた場所へと走つて行つた。

空を見上げれば空の色は茶色い。

明らかに異変が起きている証拠だらう。

とある「獅子動物病院」というその名の通りの動物病院で、学校帰りに夢でみたあの傷付いたフェレットを発見し、それをここに獣医である「獅子走」^{しきかける}に診て貰つた所、命に別状は無かく、一度ここでフェレットを預かつて貰うこととした。

しかし、なのはと念の為といふことで何かが入つたアタッショケースを持つたライトは此処から誰かが呼んでいる気がした為、ここへまで来た結果、あのフェレットがランが一度は撃退した怪物に襲われており、なのはに向かつて飛びこんだ。

「な、なにアレ！？」

「来て……くれたの？」

「えつ？」

フューレットがいきなり喋ったことに動搖するのは、対するライターはフューレットにかなりの興味を持った。

「興味深い！　喋るフューレットー　ゾクゾクするね～」

「そんなこと言つてゐる場合じやないでしょライター……」

なのははフューレットを抱えてライトと共に逃げだす。

フューレットの話によれば、ある物を集めるために此処とは違つ世界からやってきたそうだ。

そしてなんでもなのはには「魔法」の資質が高いらしい。

「魔法……？」

「魔法！？　それは一体どんなのだい！？　是非とも教えてくれ

！」

（ライトの検索バカが～）

少々ライトの今の状況とは裏腹に楽しそうに喋る為、なのははライトに少し呆れていた。

「取り合へず」のナのことは気にしなくていいから

「えつ？　あつ、うん。兎に角、君には資質がある。だから僕に力を貸して！　お礼は必ずしますから！」

「お礼とかそんな場合じや……つ！？」

そこへあの怪物がなのは達に襲い掛かつて来たが、突如現れたランと鏡太の飛び蹴りを喰らい、怪物は蹴り飛ばされた。

(アレ? テジャヴ?)

とフュレットは思った。

「またテメーか」

「ラン、分かつてると思つが……」

ウルティメイトブレスレットからウルトラゼロアイを取り出すラン。

「いや、そう易々と人がいる前で正体を明かしていいのかラン!?」

鏡太のツッコミを無視し、ランは変身しようとするが、怪物の放った帯の攻撃を手に喰らい、ウルトラゼロアイが飛ばされてしまつ。

「つじえ!? ヤロー!..」

「予習しますね……」

ランはウルトラゼロアイを取りに行こうとするが怪物は帯を伸ばし、ランと鏡太を叩きつける。

「うわあ!..!..」

「止むを得ないかな……」

ため息をついたライトはランの元に駆け寄る。

「ライト! まさか……!」

なのははライトがなにをしようかするか分かった。

ライトは倒れこんでいるランの元に駆け寄り、アタッシュケースを見せる。

その中には6本のUHSメモリのような「ガイアメモリ」があり、そして赤いバックル、「ダブルドライバー」が入っていた。

「それは……」

「悪魔と相乗りする勇気、あるか?」

ライトの言葉に戸惑いつつも、ランはダブルドライバーと黒いガイアメモリ「ジヨーカーメモリ」を掴む。

ライトはダブルドライバーの使い方を手短に説明し、その間に鏡太が怪物を引きつけ、フェレットもなのはにあの赤い宝石を渡して手短に説明をすると、ランはダブルドライバーを装着すると同じものがライトの腰にも現れる。

緑のガイアメモリ、「サイクロンメモリ」をライトは持ち、ジヨーカーメモリとサイクロンメモリのスイッチを押すとガイアウェスペーイが鳴り響く。

【グル……?】

『サイクロン!』

『ジヨーカー!』

そしてガイアメモリを2人はダブルドライバーに差し込む。

「「変身！！」」

『サイクロン・ジョーカー！』

ライトのダブルドライバーに差し込まれたサイクロンメモリはランのダブルドライバーに転送され、ライトは目を閉じて倒れるとランの身体が変わって行き、右は緑、左は黒、額には「W」と書かれたマーク、両目は赤の「仮面ライダーダブル・サイクロンジョーカー」に変身した。

「なんだよコレ……、マジで変身した」

『これがダブル……、仮面ライダーダブルだ』

右目が点滅し、ライトの声が聞こえる。

一方、なのはもフュレットから魔法の説明を聞き終えた。

「僕と同じことを続けて！」

「う、うん」

フュレットが呪文を唱え、なのはもそれに続く。

「レイジングハート、セットアップ！」

最後にそう叫ぶと桃色の光に包まれてなのはは聖祥の制服に酷似したバリアジャケットと呼ばれる服を着た。

宝石は「レイジングハート」という杖に変化し、なのはは突然の事に戸惑いまくる。

「ふええええ！？ どうなってるの！？」

「落ちついて僕の言つことによへ聞いてー！」

だが、怪物が黒い帯を伸ばしてなのはに攻撃してきたが、なのはは咄嗟にレイジングハートを構えるとレイジングハートはバリアを開けて攻撃を防ぎ、そこへダブルが両足に風を纏わせた蹴りで帯が千切れる。

【グオオオー！？】

「スゲーな、これ！ んつ？」

ダブルは足元に落ちていたウルトラゼロアイを回収し、そのまま怪物に突撃する。

『僕達が奴の動きを封じる、その隙にそこのフーレットからの対処法を聞いてくれ姉さん』

「う、うん」

ダブルは怪物へと突っ込んで行き、帯でダブルを叩きつけようとしたがダブルは高く飛び上がり、ストレートパンチを怪物に叩きこむ。

【グボー！？】

『ここは一気に決めるよ、君、名前は？』

「モロボシ・ラン」

ジョーカーメモリを引き抜き、右腰のマキシマムスロットにメモリを装填する。

『ジヨーカー！ マキシマムライブー！』

ダブルの周りに風が纏い、空中へ浮かぶとダブルは右半分、左半分

に分かれてキック……「ジョーカー エクストリーム！」を怪物に繰り出した。

「ジョーカー エクストリーム！…」

【グルアアアア…！…？】

そこでフェレットからの合図があり、なのはのレイジングハートからピンク色のリボンが放たれ怪物を拘束。

「ジュエルシード、封印…！」

怪物にレイジングハートをかざすと怪物は消滅していき、弾け飛んであちこちに破片が飛び散る。

【ギシャアアア…！…？】

そしてレイジングハートの中に青い宝石のような「ジュエルシード」が入り込む。

その後、変身解いたランはライトも田を覚まし、空も元の色に戻り、パトカーの音が聞こえ始める。

周りを見れば辺りをボロボロ……。

「ま、まずいよ！ 急いでここから離れないと…」

「ああ、落ちついた場所で色々話し聞くぞ…」

そしてラン、フェレットを抱えたなのは、鏡太、ライトはすぐさまそこから離れてあの公園へと向かつた。

第2話『Wの変身／2人で1人の仮面ライダー誕生』（後書き）

竜也はランと鏡太の親代わりに……。

次回予告

アンク

「はつ！？ ここはどこだ！？」

フェイト

「怪獣……？」

かざ
風
かみひかり
上光

「可愛いですよ？」

カオスリドリアス

「キエエエエー！！！」

光

「僕と一緒に……戦ってくれる？ コスマオオオオス！……」

次回『鳥怪人と金髪少女と優しさの巨人』

第3話『小さな勇者』（前書き）

タイトル変わった……。

次回もコスモスだけじゃ中心なのは……？

ハードボイルドなライダーも登場。

OP「Spin it」

ED「ウルトラマン」「コスモス～君にできる何か～」

友好鳥獣リドリアス

カオスリドリアス

登場。

第3話『小さな勇者』

「また」の公園に「くる」となるとはなあ

再び嫌な思い出しか無い公園へと来たランと鏡太。

そこにはなのは、ライト、フーレットがいる。

「んでも？　事情を話して貰おつか。　まあ、ありやなんだ？」

ランの質問に、フーレットは答える。

「あればジユエルシード」「ジユエルシード？」

ジユエルシードとは、フーレット……「ユーノ・スクライア」が発掘した遺跡なのだが、大変危険なものな為、船で運んでいた所、何者かの攻撃を受けてジユエルシードは全てこの世界へと来てしまったのだ。

そしてユーノは本当は一人で責任を持つて集めようとしていたが、やはり一人では無理があつたのだ。

「そういう君達は、何者なんですか！？」

ユーノの質問にランと鏡太はどう答えていいか分からず、ライトは取り合えずダブルの説明だけはしておくことに。

「あれは仮面ライダーダブル。　僕も君と同じく、別の世界からき

たんだ。 とある仮面ライダーに助けられてね

ライトはその昔、別の世界でダブルが使用しているのとは別のガイアメモリ、人間を怪物へと変わるガイアメモリをライトの力を使い、「ミコージアム」と呼ばれる組織は制作していた。

ライトの能力とは彼の頭の中には「地球の本棚」と呼ばれる地球の全てといつていいく程の知識が詰まっている。

だが、ライト自身もそれら全てを閲覧した訳ではないのだ。

そしてライトはガイアメモリを作るのを良しよせず、何度も逃げだそうとしては失敗。

しかしある時、1人の仮面ライダーが自分を助けてくれた。

ミコージアムがガイアメモリを制作しているビルに白い帽子を被つた顔が渋い男性がライトを救いだす為潜入してきたのだ。

その男性の名は……「鳴海壮吉」。

壮吉はライトを探すが途中、幹部である黒服の男達に囲まれてしまう。

「ふう……」

複数の男性達に囲まれ、全員殺氣を出しまくっているにも関わらず、壮吉は余裕の態度を見せていた。

一斉に男性達が壮吉に殴りかかってきたが壮吉はそれら全てをかわ

し、それ所が自分に襲い掛かってきた男性にはからず一撃や一撃はパンチなどを決め込んでおり、次々と倒れて行く男性達。

「うおおおおおーーー！」

男性の1人が飛び蹴りを放つてくるが、壮吉も帽子が落ちない様に抑えながら飛び上がって飛び蹴りを放つ。

結果、壮吉の蹴りのみが男性に叩きこまれ、蹴り飛ばされる。

「ぐわああーーー？」

「フツ」

蹴り飛ばされた男性は立ち上がり、1本のガイアメモリを取り出す。

『マスカレイドー』

それを首筋に当てると男性はタキシードを着た黒い怪人「マスカレイド・ドーパント」となり、さらに複数のマスカレイド・ドーパントが現れ、さらには上半身は女性、下半身は芋虫のよつな「タブー・ドーパント」が現れる。

「こんな所にノコノコやつてくるなんて…… フフ」

タブーは壮吉に対して笑うが、壮吉は態度を崩さない。

「撃つていいのは撃たれる覚悟ある奴だけだぜ、レゲトイ？」「んつ？」

「ガイアメモリを仕事に使わないのが俺のポリシーだつたんだが、止むを得まい」

壮吉はダブルドライバーのメモリを差し込む場所、メモリスロットが一つしか無い「ロストドライバー」を腰に装着し、「S」と書かれたガイアメモリを取り出す。

『スカル！』

「変身」

帽子を一度手にとつて取り、メモリをスロットに差し込んで傾ける。

『スカル！』

壮吉は姿を変え、骸骨を思わせる黒いライダーへと変身し、最後に帽子を被つて壮吉は「仮面ライダースカル」に完全に変身した。

スカルは右の人差し指をタブーに向ける。

「ああ……、お前の罪を、数えろ！」

マスカレイド達が一斉にスカルへと攻撃を仕掛けるがスカルは殴りかかってきたマスカレイド一体の拳を受け止め、空いている腕でマスカレイドを殴りつける。

「トウ……！」

「うわおおお……！」

2体のマスカレイドがスカルの背後に迫つて来たが、スカルは廻し蹴りで一気に2体を蹴り飛ばして壁に叩きつけ、もう2体のマスカレイドの首を掴みあげる。

「おのれ……！」

タブーの放った赤いエネルギー弾がスカルに迫るがスカルは今掴みあげているマスカレイドを盾に使い攻撃を防いだ。

そこで銃型の武器、「スカルマグナム」を取りだし、タブーと撃ち合ことなる。

「んつ？」

スカルは偶然ここを通りかかったライトを発見し、タブーをなんとか巻いてライトの元へ向かつた。

「自由になりたいか？」

そして牢屋のような部屋でジッとしているライトを発見したスカルがライトに問いかける。

ライトは頷き、スカルはライトにその手を差し伸べた。

「これからはお前の自由なように決める。自分の生きる道を自分で決める権利はあるからな」

そして壮吉はこの世界については何時までも「コージアムが追いつく」と思い、ある者の力を借り、この世界の高町家へと預けた。

家族の温もりを感じたのは、高町家が一番だったからだ。

*

そして現在、とある一軒家で炎斬は目を覚ました。

「メ～ガレンジヤー！？」

と何か寝ぼけていたが。

「目覚めたのか、炎斬！」

そこへナオキがやつってきた。

「あつ？ 焼き鳥……俺は……。うう、腹減った」

炎斬はお腹を鳴らし、そこに1人の少年が入ってきた。

「あつ、目が覚めただんだ」

「コードギアスの枢木スザク似の少年で、首には紐で通した青い意思をぶら下げて、名前は「風上光^{かざかみひかり}」である。

光は倒れている炎斬を見つけてナオキと共に此処まで連れてきた。

「食事、出来てますから食べていいですよ」

炎斬に光は微笑み、炎斬は「おお！ サンキュー！！」とお礼を言った後、食事があるリビングに直行した炎斬だった。

「すまない、こんな見ず知らずの私達をなにも聞かずに泊めてくれて……」

「ううん、僕、1人暮らしだつたから今まで、だから誰か来てくれた事には嬉しいんだ」

「1人つて……家族はどうして……」

両親と兄は3年前に他界、今は親戚の仕送りで生活している。

なぜ親戚と暮らさないのかと聞いた所、親戚は大家族らしく、光曰く「迷惑かけたくないから、だから仕送りだけで十分」とのこと。

「それじゃ僕は用事があるから」

それだけ言つと光は家を出て出かけた。

*

とある森の中、そこでは巨大な鳥の怪獣、「友好鳥獣リドリアス」が木に隠れて大人しくしており、それを不思議そうに見る黒い服の

金髪の少女「フロイト・テスタークサ」と狼の耳と尻尾を生やした女性「アルフ」。

「これば……？」

リドリアスを不思議そうに見るフロイト。

「フロイト、危なそうだからさあそれ以上離れようよ」「おうよ。

因みにリドリアスは眠っている。

「うーん……、そつ、かなあ？」

「いいから早く行こうって！ ジュエルシードも無いみたいだし！」

「どうやらこの2人もジュエルシードを探しているらしい。

「でも、この子……優しい子な気がする」

するとリドリアスは目を覚ました。

「クエニ

「ほらー、田覓めちやつたよー。」

心配するアルフだが、リドリアスは舌を出して優しくフロイトの頬をペロッと舐めた。

「ひやつー！？」

「クエニ

フロイトは一瞬戸惑つたが、特にリドリアスが襲つてくる気配が無

い。

「可愛いでしょう？」

突然のその声にフュイトとアルフは振り返るとそこには光があり、青い意思をグルグル回すと不思議な音が鳴り、リドリアスは何処か気持ち良さそうにしていた。

「リドリアスはね……。あつ、リドリアスってこの子の名前なんだけど。この音が好きなんだあ」

「へえ」

なぜかフェイトやアルフもその音を聞き、心が安らぐ感じがしていった。

だがその時、上空に光の粒子が複数現れた。

「なんだいアレ！？」

「綺麗……」

アルフとフェイトは粒子にそんな感想を述べるが、その粒子……「カオスヘッダー」はリドリアスに取りつく。

「キエヒエエー！！！」

「リドリアス！？ ビヅしたんだ！？」

急に苦しみ出すリドリアスに石を振りまわして落ち着かせようとする光。

だがリドリアスの顔は赤く、凶悪なものとなり、さらには爪が鋭く

なった「カオスリドリアス」へと変貌してしまつ。

「ギエヒヒーーー！」

カオスリドリアスは翼を広げて飛び立ち、市街地へと向かう。

「リドリアス！！ そつちはダメだ！！」

光は急いで街の方へ走る。

「あつ、待つて！」

「フェイト！」

フェイトとアルフもリドリアスが気になる為、光について行く。

カオスリドリアスは市街地に現れ、口から青い光線を吐きだして街を破壊していく。

「ギイイイイエエエーーーー！」

さらには戦闘機が現れ、カオスリドリアスに攻撃を仕掛ける。

「やめて…！ リドリアスを攻撃しないでくださいーーー！」

戦闘機に向かつて叫ぶが、そのパイロットは光の存在に気付く筈も無かつた。

「リドリアス！！」

光は石を振りまわしてその音をカオスリドリアスに聞かせ、カオス

リドリアスの顔は元のリドリアスの顔に戻るが、それだけでは戦闘機での攻撃は止まず、リドリアスは再びカオス化してしまった。

「リドリアス……」

カオスリドリアスは光に向かい、青い光線を放ってきた。

伏せて自分の死を覚悟する光

(これで……僕も父さんや母さんに、兄さんの所にいけるのかな？
いや、まだだ、まだ僕は……諦めない！！)

その時、光線が光に直撃するよりも早く、宇宙からきた青い球体に、光は包まれる。

そしてカオスリドリアスの光線は光のいた場所に直撃し、爆発が起きた。

だが、光は青い輝く空間の中にいた。

「光……、また会えたな」

光の前に現れたのは、青い身体を持ち、胸にゼロとも似たクリスタルがある巨人が光に話しかけた。

彼と巨人は1年前、ある戦いを通して絆を深めていた。

「すまない、光。君を助ける為といえ、まだ幼い君に……」

申し訳なさそうに謝る巨人。

「いいんだコスモス、僕はリドリアスを助けたい、僕に……リドリアスを助ける力を！！ 僕は君になりたい！ 真の勇者になりたいんだ！！ コスモオオオオス！！！」

光の持っていた石が変化し、コスモスの薔薇のようなステイック、「コスモブラック」を光は握りしめ、それを掲げるとコスモブラックは花を咲かせるように開き、青い空間から光は巨人と同化して「ウルトラマンコスモス・ルナモード」へと変身した！

「ショア！」

カオスリドリアスを戦闘機による攻撃から庇つ様に、コスモスが現れる。

コスモスは先程言った戦いで、英雄的存在になつてゐる為、戦闘機はすぐに攻撃を中止。

「キィイイーー！」

カオスリドリアスがコスモスにその爪で攻撃して來たが、コスモスは避けてカオスリドリアスの背後に回り込む。

「キエエエーー！」

「シユワツ！」

カオスリドリアスは腕を振るつてコスモスに殴りかかつたが、コス

モスは受け止めカオスリドリアスの腹部に右手をつけて押し返す。

「シェアツ！」

カオスリドリアスの攻撃は一切受けつけず、コスモスはカオスリドリアスの腹部を叩いて押し返して行き、カオスリドリアスは口から光線を放つがコスモスは受け止め、光線を弾く。

「へアツ！！」

もう一度光線を放つてくるカオスリドリアスだが、コスモスは「ルナスル・アイ」という怪獣の体内を見る技で、リドリアスにとり憑いたカオスヘッダーの居場所を特定し、そこから光の光線「ルナエキストラクト」を放ち、カオスヘッダーはリドリアスと分離させ、カオスヘッダーは消滅した。

「キエエエ」

苦しみから解放されて嬉しそうなリドリアス。

コスモスは頷くと、両手を広げて青い光の波をリドリアスに注ぐと、リドリアスの身体は薄くなり、そこから消え去ってしまう。

実はこの技、リドリアスを人がいない無人島へと移す技だったりする。

「シェア！！」

そしてコスモスは飛び立ち、空の彼方へ消えて行つた。

フェイトとアルフは光の姿を見失い、先程のコスモスの戦いを見ていた。

「あの怪獣、どこに行つたんだろう?.....?」

「分かんないけどさ、取り合えず、ジュエルシードを探そうフェイト?」

「.....うん」

フェイトはリドリアスも気になるが、光のことも気になっていた。

彼がどこに行つたのか.....。

*

一方、その頃、この森の中で赤い鳥の様な、顔の右側が金色のトサカとなつていてる怪人「アンク」が倒れこんでいた。

「うう.....んつ? なんで俺は、こんな所に! ? 僕の意思の入ったコアメダルは映司が持つてる筈.....!」

アンク.....、「グリード」と呼ばれる怪人の一人であり、彼はその中の鳥の属性を持つ者。

彼の身体は銀色のメダルである「セルメダル」と9枚揃うと事で完全な復活をする為と身体を構成するメダル「コアメダル」で成り立つ怪人であり、アンクはある戦いにおいて恐竜系グリード「ギル」と「仮面ライダーオーズ」と共に倒したが、その時の衝撃のせいか、

異次元へとアンクの殆どのコアメダルは破壊され、さらには彼の意
思が入った割れたメダルはそのオーズが持っているのだが、何故か
彼は此処に存在していた。

しかも、壊れた筈のコアメダルも一枚を除き、殆ど直っている。

「兎に角、歩いてみるか」

取り合えずアンクは金髪のガラの悪そつた男性に変身し、歩き始め
た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9302y/>

魔法少女リリカルなのはMEGAMAX SAGA

2011年11月29日20時53分発行